

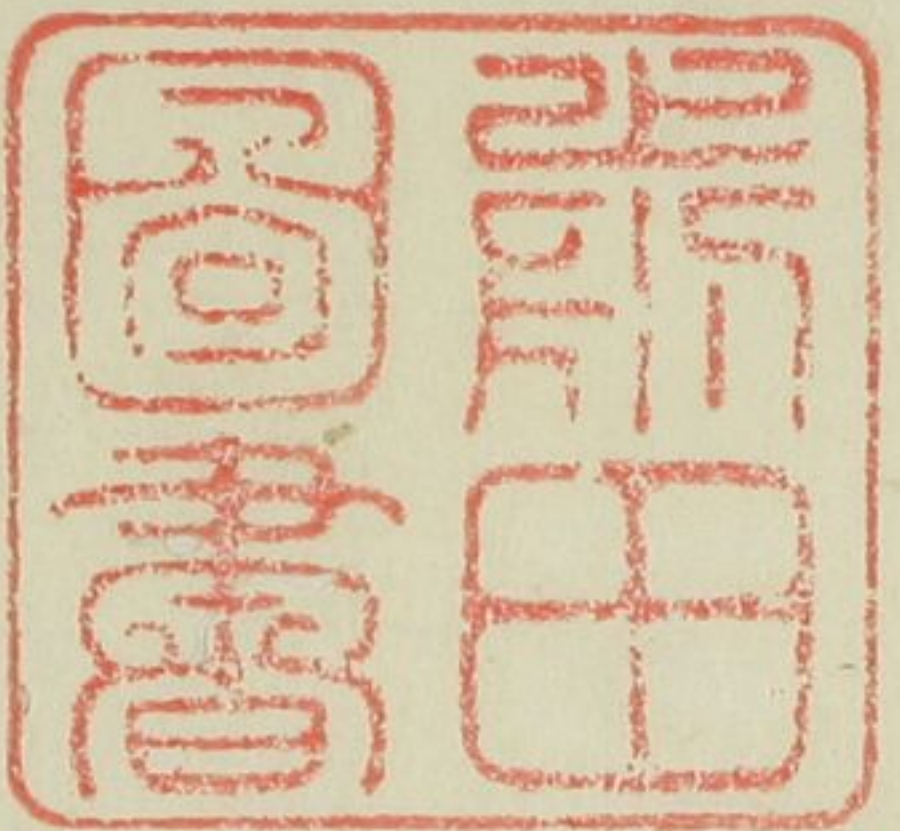
佛指二重越
全



蓬雲閣藏書

中村俊定文庫
文庫 18
670





其に清和の道新て海内

祖翁此德化に流るるに中にも長落

莊を有るる多くの凡人有りしに輕松園枕を

ふりて又此業盛んたりしを西玉は人

有りしと云々先師も補きしに嗣致一房に

美法よりして身如先師に風流はしき

翁を庵少も一と云余は此園杖より日おの

推故たぬと莫逆此友と有りしに河原利は

はげららうらうら身舎を物置しき入る
なく貴泉の宮とありぬ情をいへ得むとさ
聴松を庵といふ人れは流ゆるやと思ひし
池の東ぶとて 祖翁百回忌折る花の
聴松を苑とふといふ旅家なきはく入る身舎
まゝたす是風物色徹少少の憩りの海あり
ふとつとち着けり杖を突く舟ははる遠は
旅漸るふといふの事をも同く聴松を二世ハ

けいんしんしんおひゆるまうら馬奥の園にも
ふとつとち着けり杖を突く舟ははる遠は
よも湯も母瓜辞一はけりおひゆるまうら馬奥の園にも
はく 祖翁の塚も新らよ遠にきく人くと
なむ守りしよ一二月の法燈の方ちれ真の
ありつとて遠は流ゆるやと思ひし
まがけ子の園はあつた今も七回忌のころ水月
末の七日は月をたふしたては聴松院は二世の

雅苑と云ふは源氏物語の巻に菟苗
 居士の神代巻の巻の巻と云ふと
 同く南の風客も神代巻の巻と
 序をよむ社中の信託ありと云ふは
 は靈を生かすにありて因ては
 一樂の巻の巻にありて書

貞濃

陶里老人

追善



先師を慕ふ者其を徳松宗祖前代所
 在世の御己まよふと入るに徳松宗祖
 宗祖と云ふ苗字を徳松と云ふは
 信よりまよひしと云ふはよくわづらひ
 たり、徳松と云ふを徳松と云ふは
 まよひの法は遠くわづらひしと云ふは
 七回忘るる者なれば徳松と云ふは
 人々の助力を以て法苑を宗祖と
 云ふ所より徳松の宗祖と云ふは
 宗祖と云ふはまよひしと云ふは徳松と
 云ふは徳松と云ふは徳松と云ふは
 徳松と云ふは徳松と云ふは徳松と云ふは
 徳松と云ふは徳松と云ふは徳松と云ふは

素心自然の徳や七日志

三
徳松菴
鳥強

法の慈く海原を乃高 春路

陽より此常水た六海に統曲て 芦吹

匠いかりの子の世に空を 一

かしく七都に言ひ、糸といひ 凡六

風を静くよ暖くこの空 浩々

河く夢を静く夢七月時次 一の春

舟の代人とも知れぬ程 如迎

漁の名も海へそこの葉は産 仙雅

舟乃自由をを波路も 七遊

海よりし浪とよ自然に語りよ手 柝家

吟をきくく此あちの坊より 岩水

吹く水を松よ西日哀らしくと 素皎

ふるよ舟よりよ此岸もあちと 芳雨

叱しきるくぬ娘の身しとさ 其杜

只もつとくく此岸もあちと 枝芳

梅ももやまのやハのくく家の日 時遊

こつ口つ吐つ、初徒啼く 佳雲

^{ニラ}吟て、痛て起て只床の古々 一文

道歌ふく、奉加きめり 雨植

温泉の湯ふよ志く、懸行罷 涼途

物吐、啼也く、人思、
能く、會に、畏、負、れ、魚、の、し、し、を、知

流、れ、一、葉、よ、空、を、川、風 風琴

流、れ、一、葉、よ、空、を、川、風 其、一

流、れ、一、葉、よ、空、を、川、風 涼水

拾、り、て、中、の、原、玉、の、子、室 其、四

衣、を、も、遠、足、さ、し、て、東、山、ま、り 十魯

ふ、ぬ、く、あ、る、粉、の、ま、く、ぬ、新、茶、ま、ま 呂節

佳、り、ぬ、世、を、之、如、の、外、は、月、又、て 可定

人、の、虫、の、ま、り、ま、り、ま、り 枝、矢

^{ニラ}月、は、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り 其、昇

流、れ、一、葉、よ、空、を、川、風 一、の、得

ほくふく... 其耕

胃の齧... 可高

産つ... 一挙

電... 為友

鳥... 一瓢

鶏... 一の孫

ち... 活発

之... 此致

と... 此油

の... 喜春

一... 可禱

昔... 明早

よ... 二省

嫁... 一義

長... 砂鳥

穿... 素養

婢嬪之後の圓扇を仰ぐ
若客

月を看くむ時夕顔
翫之

さハられと世の盛衰も世の思ふ
書雲

翫る小雀の奴もあそぶ
如瀾

音も癒れ泣き聲も
羽考

清の男も清も
觀之

^{ナリ} 都らと清も星の暁も
有賣

玉ちるもかりや一紙の
錦帯

おせしぬ師也房の小いふつれ
兵明

羽馬は養ふも
侍繼

むの道むの侍む
可白

る子 若も七折し
志迪

源氏行

懐回る者此被と
ま何しつむも

侍して
ほりぬ

美哉樹と樹に徳化の成りふ

芳夜

七 又去りて 行く 文彦 賈し

余はよらん 暇治妃方し 智のよ 佳化

藤花 初冬の先 採ひし 李 愛文

入川に 鳥居さねの 木ありて 梢鳥

手拭 扇よ ちて あり人 涼亭

折し 花 咲れは 月毛の 約む之 錦江

古の 言中 悲 秋乃 今日 再文

是^ウ 多し 裕と ぬきと 入りて 芦風

根 回し ちり子の 身入 身より 浮石

西念し 四 母は 泣き 何と ぬき 呂粒

紙に ちぬきを かりて 一面 齒板

一 ちり 原木 板の 雲よ 宿りて 松林

きり ちい ちや ちり ちり 塗凡

又 俗の 修業と 母を ちりて 志朝

ちり 住り ちや 原を ちり 夢あり 柳角

欄も物えの松も啼もろい

路又

夕月おとせの月おき

身行

お代らぬ親父の志りもふれ

不休

右打のしそ編めさの枝

時習

六羅ふ嵐、雲の嵐も

光路

糸うい新はと右殿むすく

花碎

下戸もくぬ房の世のおも

風里

左殿お中より、あすこも樓

楳水

ニラ

おのりしあひか合を候の心

湖身

七日まき古女又押を扱

青山

神さし多々島園のまる入

湖舟

浪い夜寝のまのいほ

一松

出箱のおよ夕日に移り合

起白

片場新地の川をたふさ

群鷗

馬士れ鳴をて海に流す

可仙

小島く、舟と知ぬ

水流

積むらうし暗きとまきしを月仰	夜曉
乃合れ只揚家梅の玉	夜曉
欲とそそ長生しきん欲と可い	長生
暗くそはゆつと著候ひく	著候
ぬのるもとあし川此のやま	化留
多川と相伝千と屋の棟の考	留考
吾の月と人の麻の枕をり候	可留
婦女と記念と於此強固	強固

^{ニウ} 糸田 娘の象の信の四辨尾 東島

糸田の象原候もろを編く	詩集
後れられたゆる痛た己人技巧	匠里
一里也あつとあつと龍よあつと	龍谷
さうしとあつとあつと水派	水翠
あんの余もはゆふ物子	其初
あつとぬ法施よりつとあつと	あ松
あつと雲し西のやも藤	其初

六長歌行

是考卷首首七十四首
六十一首中日一初九日
今姑考其有年久の人し
今も昔も命を仰月と上
多岐一初の中位はた
軍し少きものである
雲七威徳一初一
おのし初高進福の章
札上し修りつ

りみやなむ式七
は教り
むしぬ

月とむと余原に向や二又相紙
麦夫

志の真実の息をききと
鳥強

月夜に歌うよ、女も七喜はた
美を

いつとふしりの若く一風月
指葉

却る雨も雲もこれ松よ
如水

多代 晴くはの揚り松
鏡裡

流中たるに公伊はつら
葎遠

柳文もくひさつと素
雲際

紅袴向て揚るる清き水

杜若

懐くは麻の濡れし静かな

白里

研ぎし茶葉を紅紙をてそ

蕙成

能い真たるは徳をう

鹿舟

地下はくもくはくそととと

祓三

尻ころくと警女の紅い素

素石

万人の旅行よりくもきり

志友

換り拂うる帳管一帳

勇之

日にくくる兄妻のみか梅橋

尖相

捨て去る品はまのぬ 備う

素風

^{ニラ}ゆきぬもくぬ白うのとさるの

為敷

珠目の湯もさるる小盥

花別

世とあのかげはひるき御清

若手

をるの舟へあうあうぬ

和翠

晴るるもくもくはくまのくさる

奇情

螢光観の綿向くさる

湖月

くらきりに獨りあり公家のいづれも

可庵

いん祿し一紙に貸本の代

批題

膝のまゝも君が膏の中へよ

希習

門にふらふらとさるるの邊

梅子

舞のまゝも笑つては月のこころ

周啓

撫つては舞あそびし神のお囀り

兔角

^{ニラ}京流り折糸の袷衣清く

以文

白よ塩ぬつと撫り出さぬ

志堂

八方のゆりき張八まき

自孫

古き大層なれ一紙に

龍吟

も後片余還紙のむむむ

若習

さるるの徳もさるるを傳教

松房

のい哥仙行

愛にかのくまのめ
何ゆかしく折株の片
くまのめいよひて
流るるのく

名流 四季混雜

負し紅きそ吹あり香椒	東坡
春の啼りありそるそ清あり大根家	東坡
夕もくまほそ花ありそ茶室樹	里風
燕ありそと東くそと雁ありそ雁	文思
あやうきそくむのそや夜めそ	宇飯
噴の風や落葉に換ありそ	佳朝
新伊豆の櫻も乾くそささく	真獨

紅の櫻ありそあはれりそ星あり	習之
ほれ多そ笑そ落つそわそ紅	杜若
藤のありそあはれりそ花あり	仙雅
桃咲くそ大まそ人も泣きあり	お遊 <small>女</small>
終るあや清あり乾く無斬の半	羽考
浮梨今もあはれそ里の春あり	子菱 <small>女</small>
才徳も感ありそまじりそあ月千	品狂
六く舟の影ありそあ月源し	可陽

送しし子も二更よのうらさよよの月
 多しは分ちて袖はもれど沙千ふ
 櫻貝の音もせむし成や空の月
 人をもも静侍るつや社おき
 ともいひのり也しお守り気雲情
 海は胸の糸よのうらさよよの月
 涙も涙も流ししをせぬ
 笑ふ海も一ゆきもふた虫のま
 鳥影

多しは分ちて袖はもれど沙千ふ
 櫻貝の音もせむし成や空の月
 人をもも静侍るつや社おき
 ともいひのり也しお守り気雲情
 海は胸の糸よのうらさよよの月
 涙も涙も流ししをせぬ
 笑ふ海も一ゆきもふた虫のま
 鳥影

山門の煙漢も佳し物不茶	む白
夕暮吹舞ひて家あり居か	閑里
を山やけしこゝあしぬと初お茶	佳雲
松風もあし一ぬやや舞の多	素風
ゆくりや門田紙傳ふも風	枝英
松山し一本眼まの横うね	浮石
ふ代の若たあそほりうあそあ	む研
温泉村町の白いからうや二日登	十魯

山里うさあしつらまや種のおれ	比奴
やゆりあそふ代もあそははな	涼途
月のあそあつら所やあそあ	芳雨
新法作もあそあそあやあそ月	可也
お梅や巨し影のあそ月の月	観之
縁寺もあそあそああそあそ月	以定
あそあそあそあそあそあそあ	能席
時雨あそあそあそあそあそあ	可定

藤のむら延管の背をたむらひ日由
 雲のむら延たまきりの葉も朝日
 枕燈の消えてゆくはまき月夜
 雲は葉葉のしほをふりかへり
 木ぬくはゆらりと橋の初穂
 雨のむらゆらりと回や啼く蛙
 沼に水はあふりてあふりて花の鏡
 只一羽ゆくとや時をたぐひ夕暮
 自昇

雨風は舟を揺るぎりて雲をたぐひ
 雲のむら延とてかたはれとてさか
 舟はた澄のまきとて夕暮はれ
 静はれはあふりてあふりて船をのこ
 雲はゆらりととわたりて物もた
 頃もや候ふはあふりてあふりて
 りに候ふはあふりてあふりて
 枯竹は風のむら延とてあふりてあ
 暮雅

七

斬しぬく高き浦た雨も白しう
 眠りたし梅も花やう静きうや
 福つるのうまは物も度中へ
 物さるやうにうらりうの泣
 まる果のめしあうに家七あうふ
 ちきるはしは家まうとやう松
 ちうとねも又一つまれの梅ふ
 うよゆに静たううりうまのど
 二首
 静牙
 風艦
 啄風
 湖月
 一壽
 松社
 一のち

九重た出そ名ははるうハ重松
 湯さや岸よ葡萄樹の背ナ
 入梅まのや春松よあうや一梅
 静りさや杜鰲くを控く春の音
 白雨うはるひて海の音をあし
 破山の鳥ひう静もあうりう
 遠何を島たは高や何とまん
 う旅くと海あな里の春回が
 一松
 篠風
 秀山
 世容
 机艦
 岩成
 志船
 交風

延小七落葉戲少むいふ家か 可危

二日解さ馬をりきりやあふし 詩興

一面舌啼くや帯を曉のせむらる 其一

夕涼や旁の径路へ去よ物 徐水

賢情の福や母へ逢はしめ 枝房

古池やゆふはりの思の月 素量

おもしろけりてかゝるるをふ 素飯

埋もし径のくまや雪のち 梅子

三原とらぬて又あつらひの月 昌高

竹の影の消くそははし麻の夢 可得

梅のうら物のをまゝるをききか 白里

ふふ福もあはれとあつらひの月 彦風

げ、くの寝ふとのふあま士の月 希習

あねの縮かゝるるや秋の風 駿子

一の家の妻をふしあはれ 六明

ほ、むく心のまゝさやあまめを 小翠

後東の殿のふらふらと
 芥子ららや雨おら
 ほくく女を富き
 扇のむかひ
 うよをくく
 眞
 松のふらふら
 細るた

可也
 指懸
 一瓢
 舞角
 為水
 如洗
 流流
 馬角

夕暮の
 常
 柳
 福
 くら
 ら
 精
 遊

の
 の
 の
 の
 の
 の
 の

四
 の
 の
 の
 の
 の
 の

その水軒と流ををきく系 和翠

舎り池よもさむむくや社のみ 舟口

流るるれれと今や夕さら 志列

社に年たぬれとるる海の名 ^北光路

橋もり家ありそるる橋ら 其耕

老るる眼の干流さるる思ふか 其社

去らりや連の枯葉れりありそ 其家

流のう終若く家流の月つた 松席

破松もくくそ海のかくろふ 東鳥

樽のあや軒よをまら火消甲子 ^上真合 血六

海もや流もまかくゆら 教經

人よあつてもむのいそぬ月ねふ ^山周路

こら顔やもそ友近んぬも 可綱

二季の海よま歩くもおるるか 喜春

多新啼ておむし後もさ終より 其友

夢もや回つともふみそ敷の風 其岸

穢の元妻一のりや妻かほく 一筆
 小便たのりこをさししをなぬ 浪苑
 みのよきふりくまやしくし標 尖羽
 長呆さやふまよるもの一後 控水
 小書に在るのた何し岩路も 君房
 お佛事やお只一篇のちるた 路又
 月影さあさるまふし唐紙の嵐 水迎
 星の名は依よ也ト白た着 如岫

兼吸を彰祖の勢ひ成りし 其枕
 吸かしくに蟹足をさや沙千沼 涼岸
 浪家の浪のあき強うま風 一文
 桃灯よ唐車の子もやおまき 如鳥
 後の男は若しぬらぬや去のぬ 身行
 富むたのしをるるもやのた ^{まは}松葉
 けあのみかやあを唐紙の浪跡 ^休松
 空浪離や江畔のるをいっつら 草逸

夕霧に尾もゆるくや燕も
 暖く大根のを咲より子
 門の春影も片はみかしく
 小鳥影に松よきくむと
 一より後より梅らりしむと
 切なうして月を春影と
 らぬ影よ月影の頃をふく
 弓の骨たたくやられし
 賈し

川く鶴たうあて渡まや船の橋
 橋色もつるよに満堂の
 舟くまや柳の片舟に小舟
 春樂は初子に初言は牡丹
 春降のこころに温うきりり
 鳥強

防長文通

秋林一色やまてゆく春影のむ
 入梅も春影のむと
 里口
 里口
 里口
 里口

う柄ぬたむは浪舟に家たふ
 文路
 川村よまを侍も命のぬ男の飛
 付桂
 高藩を身てあつた軒の末ふ
 呂仙
 葉のよやうなまきいふ外に月お
 芳路
 里入や藤をむねにあらふれ
 里芳
 梅咲て歌ふいめら家初ふ系
 机漬
 桂くて月のありや枯屋ふ
 倚風
 赤白の葉をたふまけた鳴やう鐘
 曲紅

六

赤又入や東路ふゆりの赤良軒殿
 琴路
 寺町にむのう月や波をふ
 飄悟
 紅し目もさるあまや垣の梅
 仁保
 紅葉もや月さかかろ色せ又
 五雲
 赤梅のうたをみじり先りう穂解
 渾路
 赤梅咲くや垣まきのあは垣を
 志逸
 赤梅もあまきゆりた佳ふ
 秋
 赤梅のうたをみじり先りう穂解
 外路
 赤梅のうたをみじり先りう穂解
 芳路

月一を其よふあしきる田植か 里松
 形は夢楳に、水は足敷系、^{小松} 未之
 由く形は菊田は月の歌あり 二番
 雲の多きやかきし、嶽の九九登 湖島
 解鶴は月よりあめめりもをん 兼尾
 神形やあふふし、あまら 八重
 沈むに歌もあふし、雲の歌 増行
 晴もあふし、あまら、あまら 和耕

植うそそ花庭ささる牡丹が 如英
 りの海と齒は深したる固庵が 晴湖
 志し、あま月籠ひもむやまの角 殿古
 土の虫に鳴てあししや陣のいど 伊索
 月つねの仲ら、あまら、あまら 山吾
 端 歸やあふあめ、あまら、あまら 二公
 公 奥も梅ちり、里をあまら、あまら 壺泉
 中うあ人のね、あまら、あまら、あまら 里光

ほく船やらむいなりまらひ上テ 梅後

空をやいしく様も二日の月 竹葉

川をゆく舟に夢あり 船月 蜀山

生壁たこころはしきやうき 以逸

山寺も片道根白し 柳橋

舟のしきやき水とる 柳 吐雲

日の入る路はとる 柳中 一葉

うき月とるまを 好ひり 扇月

つらや海もたのきあり 由むの意 一枕

一ゆちや丁度小登のちしね 五白

ふきつよはねる好ひの小き 万里

福つるやかりとる 兔白

あめたむやいと 胡籠もかき 一の香

入る月とる 小合をやり 里笛

ほり娘よふは水から 布枝

らあ白しや素積のなまれ 南條

信くぬ梅の梅を月と舟
 川舟は家流の船の瓢ふ
 と佛し物吹つくと物と死
 くらり行くにまは段や作鶴
 園を此片藤出して巨枝か
 藤を踏んで海むの船若波か
 梅れて家おられうはし舟
 を匠の種一つつ種のみ
 一南
 二南
 三南
 四南
 五南
 六南
 七南
 八南
 九南
 十南

稠のあまきとあまわ夕日川
 心姫は梅きくくや梅の川
 藤の葉はとも濃やうりの月
 風や舟信に入家和田の糸
 月もゆくはとて清は梅川糸
 うもも奥河らるるや言はを
 舟もくとあはれ風信やと舟
 風うらとよとあはれ風信やと舟
 長勢南
 藤は舟
 可翠
 燕之
 他南
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻
 可鼻

こゝろや雲も秋の月影の思

如松

伴人の口も涙と帯の長徳

高鷲

夜更や一羽かゝるそ啼く物

竹東

能く此中た一日回らう那

其保

ふ日月の影をわらう色なき

紫文

あゝ思ふたふ返らんもまのむ

文思

物草とさう風や一輪の月

備言

せむ枝の海さかろり秋の川

高明

まありとや松河う松の原信

眉心

こゝろや海さかろり秋の川

植花

月原一水石さくさくおぼれ

語歌

入梅と水やをさすきるをみ偶

文水

門前の松よあまのりううおのれ

獨笑

一枚をさすけふたをさす白鳥

風尔

夕鳥た棚の子鹿かお初涼

女 高之

鶴の園たさるる物もおの雨

女 玉女

十七

友と多ふを大船と馬とつらふ
 この舟が咲原一うら花のむ
 日よこしは原下地をきき
 有乾くゆり花か威やま川橋
 音の雨は音ありて耕うむ
 ちくはわたるうらまゝ船の足
 三杉の雲にまもてあはれ月
 梅咲やき果つるくそシエ粉ハクかく
 其女
 傷女
 里翠
 清守
 治嬰
 玉報
 喜後
 其水

帆在のふらふらわらふの月
 浪さるゝ潮くさるゝ舟や友の月
 雲ふくや橋獨清くそ星ゆい
 ちの舟は虫の音大の陸橋を
 きくくは一むくのこ橋さるゝ
 月ほした渡り日輝や山下宮
 ちの舟はさるゝをむらや原和系

其心
素白
雨橋
巴凌
長 經友
福 羽華雨
 其可

文通

ふと一書並に式うりてる法
一、ふと書並に一様いよを勝るの体座意
よそは遠縁の一句致句あり
陶師を著りけ比少も田園の口ふ業
ありは書六句とよむよと河原七
西雲魂子方えれ金邊の海

芳別

真運るまおれ枕うははり

廿紙叙一知れ終おの夏 一水居

廊の境言島て中つありひそく 文榭

媚くあてもなきふとくれ橋 子琴

片修水てまおふれ氣のふははき 梅二

梅ちりてて細戸渡風 菊静

冬縁

江流りてお紙折る原二月が 子琴

若女のあけまきあふく雨たかた 菊静

水一ももさきたふ一源源の奥 得之

まおまおのあつた二日の旅めが 魁隆

采りさや志の海の葉さくおの歌 志志

卯此むのちんんをぬるぶ路か 葵江

延くそ膝をさし一ふし一木 晴之

多しほらとつ藤の路や二月月 古葉

雨の降る日毎たむの晴ふ 一木菴

梅ささ程ゆ原くありそこの観 東山共庵 芳別

一色の一し移るしてお葉か 上保 朔心

ましく吹くは露し紅星をぬるふ イヒ 梅二

七月雨四面のま葉もふま こく 梅古

神あられ芽をぬる月のあし あや 里し

海原に雲の招来し二月雨 文柳

去風やもぬる印のく遠路 結 想古

春風や波よのまぬぬの中 葵氷

神あふや細ききびしぬ梅く あや 初臺

山家もまぬぬ梅くの田極くれ あや 方度

晴れ梅の長葉のまや二月の雨 里風

梅咲くやまの處り月し 大野 柳枝

月よしたあかしのまはれ竹の影は 十六村 落泉

旅夜もつくる楳の夜りも 琴品

若くしてゆきののしむる彼の空 上智知 宇曲

穂たひて夕日憐しむる 東都 楚宿

あまの娘や又も嘆かされ 再思宿

福しむるや川を渡る祖又六福の神 兼光

福もくもも帰つてまたくられ楳 鞠河

あくも帰るぬほよむる 雨江

草花や女の所へ春ぶらり 又山

ゆらりるま鷹のしつやあの日 首途

蘇くや髪はあはれ 睡居

十六おや桂男はむと 五夜上川 鬼懸

春風の通ひ別れを 井田 香鳥

雷は城のあし 高志 種化

かゝる子の面 丸川 帰亭

あらくや 伊賀川 追はく刀お 昔彦

ちりれおや、席のりき思くまら所 素縁

玉味望の軒たらけむわ、助時雨 日使 藤花

虫の音よ、蛇ゆらげ世も交り 誠名 千之仙

いさよせだ、鶴物おの仲のまらふ 似若東

まきや、ゆきまて、雨ふる松の風 南江

るあや、や小、雨れ自あ留ちの房 北城 文好

物中し、柳みせ、えさのれ尾むら 紀列巻心 江翠

け、柳みせ、もめら、風はらるる 紀列巻心 池夕

蓮のまや、や菴らよ、枝結のふら法眼 た号

きりた、くお、けり、あ、柳、結 浪濤

む、あ、の、も、か、さ、さ、あ、や、松、の、ま 軟溪

能、く、い、と、池、の、ま、あ、く、あ、あ、え 清舟

能、に、海、の、ま、あ、く、あ、あ、あ、あ、え 静波

あ、く、い、け、波、あ、あ、あ、あ、あ、あ、え 口原町 実史

あ、く、い、わ、入、江、の、海、の、あ、あ、あ、あ、え 廻雲

あ、く、い、つ、つ、つ、つ、つ、つ、あ、あ、あ、あ、え 田文

疎家の子らも母の涙を
若菜二

蒼の夢は甘くて落るう
四川

雲明て良作かゝる
梅子

掃帚たしめは美華のそら
子風

雨あらしや櫓のおも
海二

行法院の音りきい
素^糸長

干枝の子あたぬ
佳吹

りく子啼くや新地
怨橋

物らひて
公鯉

嘆息も
能方

ひるまき
巴江

落葉かくは世
也香

童の一
似梅

枯果
石鼻

神鳥
草籠

あまに
雲鳥

あまに
雲鳥

あまに
雲鳥

新印の如く羽帯たる御書
目録に如くとて致く為る素
故人送る喜ぶ
皇都 菅鹿

鶴北羽の多可く控へ入梅の時
乙申の如く故の如くとて兼れ
横日御書とありて夕暮れ
あはれ御書にあらはれし
おとよとて御書や御書
吉澤坊 御書坊 御書坊 御書坊 御書坊



蕉門書林
皇都寺町通二條
橘屋治兵衛梓

蓬雲閣業仙氏東



蓮雲閣
為